
適性検査

辰野さとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
適性検査

【Nコード】
N1110T

【作者名】
辰野さとる

【あらすじ】
近未来、職業安定所が無料の適性検査をはじめた。その検査を受けた人間は、必ず理想の職業を見つけることができるというが……

窓から差し込む朝日を瞼に受けて、彼は目覚めた。

今朝は目覚めがあまり良くない。なにか、悪い夢を見ていたのだろうか。

彼の目覚めを感知したテレビが映像を流し始める。

『理想の職業を探しませんか？』

コマーシャルの言葉が彼を苛立たせる。彼はどうしても今の仕事にやりがいを見出せなかった。昔は天職というものを信じていたが、今の彼にとってはおとぎ話のようなものだった。

世の中は適正なんて求めない。ただ、結果が出せるやつはその仕事に向いていると言われる。

他人からの評価以外に、価値のあるものなんてない。

『最新の適性検査を無料で用意しております』

見れば、広告主は国営の職業安定所らしい。無料という言葉に釣られた彼は、気まぐれで職業安定所を訪れた。

案内された部屋は壁のない病棟のような場所だった。無数に並んだベッドに人が眠っていて、その間を技術者らしい白衣の人間が歩き回っている。

「俺は適性検査を頼んだはずだが……」

彼は急に不安を覚え始めた。

もしかしたら、なにかの実験台にされるのではないか。無職の人間には、身寄りのない者が多い。いなくなったところで気づかれないのだ。

「ここでは特殊な機器によって脳を検査し、適性を導き出しています。ご安心ください、危険はありません。あのよう……」

彼女が示す方向では、ちょうど一人の男が眠りから覚めていた。

男は喜びを顔ににじませながら、周りの技術者に頭を下げ、部屋を飛び出していった。確かに、危険はなさそうに見える。

「では、ベッドへどうぞ」

彼がベッドに横たわると、白衣の技術者が手早く彼の頭に機器を被せた。彼の意識がゆっくりと落ちていく。気づくと、彼はどこかの会社の社内にいた。周りでは沢山の人々が働いている。

「ここはどこです？」

「自分の会社も忘れるほど眠っていたのか。早く目を覚まして仕事にかかりたまえ」

どうやらこれが適性検査らしい。こうやって働いて、適性があるかどうかを調べるといふことなのだろう。それから一週間のうちに、彼はその会社のあらゆる業務をこなした。しかし、一向にやりがいは感じられず、彼は落胆のうちに七日目を終えて眠った。

次に目覚めると、彼はまた見知らぬ会社にいた。これが適性検査の流れなのだと悟り、彼は再び全力で働いた。

ベッドで横たわる彼の傍に、二人の人物が立っている。

「よくこんなものを考えたな。現実の数千倍もの速度で職業を体験する……」

肉付きのいい男はとある企業の社長で、この日は求人情報を持って職業安定所を訪れていた。

「私の最高傑作と言っていいだろう。世界中からのオファーで笑いが止まらないよ」

もう片方は社長の旧友で、このシステムの開発者である博士だ。

「それで、彼らは使い物になるのか？」

社長の問いに、博士は自慢げに答える。

「実際、なにも知らない新人よりはいくらかも役に立っているさ。研修なんて面倒なものは必要ないんだからな」

一連のサイクルを何度繰り返しただろう。彼はどの仕事にもやりがいを感じられず、働くことに嫌気が差し始めていた。

「嫌だ、嫌だ、もうこんな生活は沢山だ」

彼は家の中に閉じこもりはじめた。最初は楽だったが、三日目には預金残高がなくなった。四日目には電気が止まり、五日目にはガス、六日目には水が止まった。

七日目までに、彼は『無職』という職を体験し尽していたのだ。

ついに狂人のようになってしまった彼は、七日目の夜に部屋の窓を開いた。

死んでしまえば、なんとかなるかもしれない。

彼は目を閉じ、自室から外に飛び降りた。

「そつえば、彼らはずっと働く夢を見ているようなものなのだろう？　あまり時間が長くなれば、狂ってしまいそうなものだが」

「ああ、ちょうどあの男の脳波がおかしいな。どうやるか見せてやるつ」

博士は横たわる男に近づき、その腕に注射を打った。

「これは労働の記憶だけを消し去る薬剤だ。他の記憶には影響しない。定期的にこうやってリセットをかけるようにしているんだ。適職が見つかった場合もその職以外の記憶は消している。他社に内部事情が渡つては困るだろう？」

博士と社長は目を合わせ、意味ありげに笑いあった。

窓から差し込むほのかな朝日を瞼に受けて、彼は目覚めた。今朝は目覚めがあまり良くない。

なにか、悪い夢を見ていたのだろうか。

彼の目覚めを感知したテレビが映像を流し始める。

『理想の職業を探しませんか？』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1110t/>

適性検査

2011年10月9日03時26分発行